

第2班第五回研究会報告書

日時：11月28日（金） 18:00 ~ 20:30

会場：龍谷大学深草学舎 紫光館 3F 地域 ORC 会議室

参加者：富野 暉一郎、阿部 圭宏、阪口 春彦、林田 久充、西田 俊之、広原 盛明、
深尾 昌峰、山口 洋典、田村 瞳（敬称略）

議題：

- 1、LORC 年度内事業予定について
- 2、国際シンポジウム及びワークショップについて
- 3、公共政策カリキュラムについて（阪口報告）
- 4、その他

配布資料：

- 1) 「地域公共人材」育成としての職員研修（富野報告）
- 2) GP (good practice 資料
- 3) 図 セクターの位置と機能（試案）(阪口報告)
訂正 公共機能（下から7行目） 公共性
- 4) LORC 年度内事業予定
- 5) シンポジウム企画書

内容：

- 1、LORC 年度内事業について
- 2、国際シンポジウム及びワークショップについて

はじめに、富野先生による第2班の年度内の予定と1月に開催予定の国際シンポジウム & ワークショップに関する説明及び各研究員に対する役割分担の依頼が行われた。その結果、次回以降(今年度)の研究会は12月にあと1回、そして講演会を3月に1回開催することが決定され、研究員からの同ワークショップに対する協力の支持が得られた。

- 3、公共政策カリキュラムについて

次に、前回からの継続協議事項である公共政策カリキュラムについての議論が行われた。まず、富野先生から次回の研究会に GP 選定の関係者から報告をしてもらおうという提案がなされ、他の研究員からの合意を得た。それを受けて、GP 資料の中から第2班の研究内容である「地域人材育成」に近い関連プログラムを選択した。（以下に記述）

高崎経済大学
群馬大学

大阪府立大学
千葉商科大学

そして、次回の研究会において、上記の大学の関係者から（うち 2 校ほど）報告を受け、議論することで決定した。

続いて、前回の富野先生による地域の公共性と公益との関係に関する報告を踏まえて、阪口先生による公共性と公益のかかわりに関する報告が行われた。（レジюме参照）意見の集約までには至らなかったため、次回までに各自、公益について考えてくることになった。

なお、研究員による質疑応答は以下のとおり。

【質疑応答】

富野

公共機能というものを受益と負担の関係で仕分けしていくという考えか。

阪口

そうだ。

富野

当該社会の構成員によってコストを共同で負担することの妥当性という、当該社会といった場合、公の部分と共の部分と私の部分と別々に想定すると、公の部分の公共機能を誰が判断するのかとかになってこないのか。たとえば、会社という組織がありそれは私の部分。その公共機能は社会全体が判断することになるのか。

阪口

公共性の判断というのは、各セクターがこの事業については公共的なものかどうかを判断し、これは受益者に負担してもらおうなど各セクターが自立的に行う。

富野

ただ、そのために受益とコストの判断は、個々のセクターが行うとすると、当該社会の構成員によってコストを共同で負担することの妥当性と、当該社会全体での判断とどういう関係になるかがよくわからない。たとえば、会社がある。道路や水道を使ったりする。そのコスト負担は、道路は公共負担なのでコストはなし。税金で支払われている。それは、会社が判断するのではなくて、要するに社会全体が判断する。会社にとってみれば、自分ならどういう社会貢献するか、どのような公共財を使うかというのは、社会全体に決めてもらうものではない。そういう関係はどのようになるのか。

阪口

道路を使うかということか。例えば道路整備という公共事業があるが、企業が行うものではなくて利用する側。その道路を私企業が使うときにどういう負担をしてもらうかは整備する側が判断する。たとえば、国が道路を作る場合、この道路は料金を取ろうなど。

富野

公的セクターが決められるというのは、税金を取っているから。そもそも税金を取っていかどうかがある。つまり、今道路特定財源というのがあるが、あれは本来は時限立法でしかも暫定税率とってやっている。都市計画税とかとは全然違う。そういうものを財源にして道路をつくる。そのときに政府が、要するに公的セクターとして共的セクターや私的セクターが利用するものを公共事業としてつくってきた。それを利用するとき共的セクターだから無料、私的セクターだから有料という決め方はしない。すると、受益者である当該社会、この場合セクター。そのセクターの持っている公共性や非公共性を当該セクターが決めるという話と一律に公が決めていいという話はどこかでつながらなくなってくる部分があるのではないか。

山口

率直の感想だが、この図の軸(富野レジュメ p 5 参照)にとらわれすぎている感じがする。強制力と非権力の軸と市場性と非営利の軸が直行しているから、プラスマイナスがあるはず。が、プラスマイナスの概念はない。平面としてマッピングするときにこれでいいのかということが一つ。二つ目は、せっかくNPOではないという形でポジティブにそれぞれのセクターを位置づけようとしている中で「非」という使い方はやめたほうがいいのではないか。否定形ではなく、もっとポジティブに語れないか。なので、強制力の反対が非権力ではないと思う。非営利の中でも市場があるわけで、ここはマーケットの捉え方が一般名詞なのか、もしくは経済的な意味でのマーケットという部分で違うと思うが。「非」という言葉を使わないで語るのが今回マッピングしていく上で大変重要だと思う。

西田

今話があったとおり、ベクトルで見てゼロ以下がないような気がした。権力、営利性もゼロがスタートだと思う。その中で、権力性、営利性そして、行政に入ればよく分かるが、公益性というベクトルがあればもっと説明しやすいのではないか。

富野

僕もこれを見てて3次元とってた。絵で全部語るのがそもそも難しいのかもしれない。

阪口

あえてもともとクロスしてあったものをこうしたのは、軸にしてしまうとそっちではないといふうになってしまう。入っているもの以外の正確は含まないという性格になってしまう。境界がはっきりしないものになるので、あえてクロスはさせなかった。

山口

でも点の集合として境界をまたぐことは可能。直行しないという説明にはならないと思う。もしそこがないというなら、ないと言い切ることも必要ではないか。この軸を使い切るのであれば。

富野

今の話はおもしろい。たとえば、非権力をなくしてここをゼロからはじめる。つまり、強制力をゼロからはじめて、上に行くに従って影響力が上がってくる。営利性もゼロからはじめると、「非」はなくなる。まったく権力がない状態、いわば全く拘束力がない場合、逆に稼がなければいけないといふように...

山口

そうすると（富野先生報告の左図）これを言っているだけ。

富野

強制力の反対として連帯力とかを...。営利性に関しては営利性をゼロではなくて儲からなくても何か生み出すなど社会的資本みたいな。そういう考えもあり得る。もう少しプラスに転化してくる面もあるかもしれない。

山口

これはどうしても軸のように見えてしまう。むしろ、曖昧な概念を示す場合、私と公と共をきっちり示したほうがいい。この3つは何なんだというのがこっからは見えない。

広原

あまりマイナスの部分を言いたくないというのはよく分かる。プラスとマイナスは同じ尺度の位置関係みたいなもの。このクロスしてあるのは強制力と非権力と書いてあるが、これは同じ力の軸。こちらは、外圧的に動かされるところの領域。こちらは、内発的・自発的・主体的に動く領域だから、同じ尺度のプラスマイナスではない。だから、しっかり言葉の概念を決めてすればクロスにしたほうがいいと思う。営利と市場性については、力に匹敵することと言わんとするなら非常に難しいが、これは必要性を満たす、又はニーズに対応する仕方。このニーズに対応する場合、営利を媒介に意欲的にやっていくものもあれば、それを媒介しないで、その必要性そのものを認めて対応しようという軸でしょ。

富野

強制力、非権力というのは、まさに主体性と自分で動いていくという軸。

広原

たとえば、社会的必要軸ということにすれば、社会的必要性に対して何を動機として対応するのか。営利を動機として対応するのか。ミッションみたいなものか。

富野

これは経済的動機、こちらはミッション的動機。

広原

プラスマイナスの関係ではないと。

富野

市場性はどちらかというとお金によって動かされている。こちらはミッションで動いているので主体性の部分でもある。

広原

いい言葉を的確にすればむしろ僕はこの4つでクリアに表すことができると思う。

富野

プラスマイナスではなくてそういうニュアンスでしっかり書かなければいけない。

山口

プラスマイナスでないなら グラフの提示（ヒストグラムなど）、それを書くのであれば少なくとも私と公と共は何なんだというセクターのことを書ききらなければならない。

富野

まさにそういうつもりで書いた。社会における役割、領域が違うんだというところを分けて分けられるところをどういう共存の仕方があるのかという...社会の中でどういう位置を占めているのかという位置づけをしたい。

広原

質的な転換点という概念というのがある。だから単なる程度の差で変わるのではなく、どこかで質的に変わる部分が出てくる。その質的転換点はこの軸であるというのは十分説明できる。だから僕はこちらのほうがはっきりすると思う（富野案）。

富野

そういう意味では阪口先生がおっしゃったように、言葉明かしで対照的にきちっと質的転換を説明できればいい。

阪口

逆に言うと、この強制力とか非権力、非営利、市場性という軸では、公共私を説明しきれないということを意味している。それが言いたいから、これでは区切れない。

広原

軸設定そのものできないのか、この軸設定では説明できないのか。

阪口

適切ではないというか、この軸では公共私を提供することはできないと思う。ただ、特徴は説明できる。

広原

僕は3つの公共私や領域があるので、三角形の領域でそれぞれのところに%が出てくるような。ああいうものでやると3つの領域だから、比較的上手く入るではないか。

富野

3軸を設定する場合、そういうのは最初に「共」点を設定しなければならない。今まで「共」という領域はなかったから、その「共」がどこにあるのかを説明しなければならない。

広原

明示的に提示する仕方と残る領域を共とする仕方がある。非営利非権力というから非常に受身になるから、非権力に変わる言葉を積極的に与えれば、そのプロセスの領域が共なんだということができると思う。

阿部

これが難しいのはセクター論と公益、私益の議論が理論の中で重なっている気がするから。これはまったく違うものだと思う。

富野

この議論の始まりはまず公益というものを議論しよう。公益に対して公共性を提示していく。この前、公益の提案をした。前回の提案で公益というのは、一般的に言う最大多数の最大幸福ではなく、現代的にもう少しアレンジするならば、社会における持続可能性を

極大化する。そういうことを公益にしたらどうかと。ただし、持続可能性には 3 つの側面がある。つまり、経済的持続性・環境的持続性・社会的持続性。そういうものを極大化する、公益とすると、実はそれがそれぞれの政策的課題に対応する。そういう形で公益というのは、それぞれの政策的課題に対応するものと想定したらどうかと。たとえば、環境的持続性というときに、行政だけが対応するものではないだろう。経済的持続性というときも、企業だけが対応するものではないだろう。そうなってくると、公共性というものはそれぞれのセクターがそれぞれの持続性に対応してどこまで関与できるかというところで公共性を定義できるのではないかと。ということで、各セクターがどういうふうにゾーニングしたらいいかということでこの話を出した。おっしゃったように、公益性をまず定義することと、公共性をそのなかで定義することはつながった話として提案させてもらった。

山口

で、公益性にしても公共性にしても「～さ」じゃないか。これって「～っぽい」など心理学でいう評価尺度が何なのかということ整理すれば定義になると思うし、マッピングするならなおのこと、もう少し評価尺度にこだわったほうがいい。

阪口

何かおかしいなと思って報告していたが、印（阪口レジュメ参照）の「公共機能とは」は、「公共性とは」の間違い。だから、公共性、公共らしさは何なのかということ、コストをどう負担するかということところで、私は決まってくるのかなというアイデア。

山口

だから、協働負担率ですね。尺度としては、負担することの妥当性だから。

富野

たとえば、江戸時代の農村社会ではコストは皆で負担する。だから、あれはどちらかというといゆる共のほう。だから、現代における公共とは、偏っている。つまり、行政はものすごく大きくなってしまったから。つい我々は行政に対応するにはどうするか、というふうになるが、セクターの考え方はそうではなくて、セクターはそれぞれ独立した機能を持っていてそのなかでおっしゃったとおりの部分がある。それと誰が決めるのかという問題と距離がある。そういう意味では、負担率などそういうことになってくると、近代の社会構造、つまり、資本主義的な制度が機能してある意味では福祉国家がいたるプロセスのなかで、ある国家像、権力像がすごく影響しているのではないかと思う。だから、社会のあり方としてはもう少し違う面もあって、まずどっちかっていうと各セクターのゾーニングと公益を別に考えていくほうがいいと思う。

阪口

コストの負担というのは、税金だけではない。たとえば、大学が何か公開講座を開くときに受講料を取るか取らないか（大学負担）を判断するとき、その講座の公共性を求め判断するのではないか。

山口

それは違うと思う。そこまで考えて貨幣価値を投じない。それは外部から評定すればそういうことになるが、それを言うことは今は妥当ではない。つまり、講座の受講料に対して「公共性」を持ち込まないのはいか。説明はできるが、実際はそうではないのではないか。RECのコミュニティカレッジに公共性云々ということを考えてやっていないのではないか。具体例で挙げるのではなく、もう少し抽象度を上げて考えたほうがいいのではないか。

富野

公共の機能を果たすことは、それぞれのセクターがそれぞれの機能を果たすということ。逆に言うと公共性とは何なのかということ逆に戻らなくてはいけない。そうすると、公共性というのは、公益を増進させることだと思ってしまう。だから、負担の問題ではなくて、いかに公益を増進させるかだともう少し公共性に近い感じがする。

広原

議論の仕方として、あらゆる場合を想定すると、果てしなく広がる。アウトプットとして何が必要なのか。要するに簡易モデル。それは精緻に考えるとすごく落ちはあるが、大局的には致命的な欠陥を免れて、ある程度の説明力があるモデルを構築することを目的にすると、最終的には、公共私セクターがどういう軸に沿って分布するのかという簡易モデルをつくれればいい。だから最終的に、その軸を発見することである。2軸なのか、3軸なのか、もっと複雑な軸なのか。これで（富野案）言うならば、権力性の軸、営利性の軸、必要性の軸で何とかならないか。

富野

必要性はどういうところなのか。

広原

必要性というのは、最も根源的な軸。そもそも社会のいろいろな領域ができてくる根源になるもの。要するに、組織体が存在していく最も根源的な...、必要性のない組織は長持ちしないし、だから必要性はある意味社会的ニーズ。それを満たしていくときに、あといくつかの軸がある。一つは、営利性の軸。これは、これを満たせば金になると。お金になら

ない必要性もあるから、それは権力性で満たす。そういうふうに理解すれば、3軸でそれぞれの公共私エリア設定ができないか。

富野

必要性というのは、測定可能というか、必要である、必要でないというのは、どういうふうに考えていくのか。

広原

世論調査でも出てくる。さまざまな調査で、ニーズの切実度、必要度というのはいろんな分野で絶えずやっている。客観性は入れなければいけないが。

西田

自治法のなかから言うと、自治法のなかに単語としてあるのは、「公共、公益、営利」。この3つの住み分けは、基本は「公共」。公共のなかで権力機能を合わせ持つのが、公共という分け方。その意味では、この図を工夫すれば表すことができる。端的に言うと、この公共部分を説明すればいい。それが公と私の間で、2軸で扱うのは難しいと思う。

広原

皆から意見を求めたらどうか。

富野

今ここで結論を出すのは、難しい。皆さんのアイデアが欲しい。

4、その他

次回研究会

12月24日(土) 第2班研究会 12時～ (昼食含)

終了後、教育・研修システムWG ~4時

於：キャンパスプラザ京都

以上